

東京大学

理学部広報

第3巻 第4号 昭和46年4月15日

3月 理学部会合日誌

- 6日(土) 10:00~12:00 総合計画委員会
10日(水) 11:00~12:00 人事委員会
13:00~15:00 主任会議
15:00~17:00 教務委員会
15日(月) 10:00~13:00 会計委員会
12:00~16:00 理学系研究科委員会
17日(水) 10:30~11:30 人事委員会
13:00~17:00 教授会
20日(土) 11:00~13:00 総合計画委員会
22日(月) 12:30~14:00 理職との会見
24日(水) 11:00~12:00 主任会議
29日(月) 11:00~12:00 学位記授与式

教授会メモ

3月17日(水) 定例教授会 於4号館物理会議室

1. 前回議事承認
2. 人事異動等報告
3. 学生卒業に関する件(別表参照)
4. 研究生に関する件
5. 学内情況報告その他雑件

入学試験に関しては二、三の小さなトラブルがあったが無事終了した旨報告があり、理学部の協力に関して部長から感謝の意が述べられた。

地震研、応微研および農学部における状況について報告があった。

また、この問題に関して職員問題については慎重を期するよう学部長から要望があった。

教育学部の部長選挙および工学部における博士コース進学などについて学内で多少の動きがあるとの報告があった。

前回の教授会で承認を得た学生援護会への寄附としては理学部では106,600円が集まった。

6. 評議員選出の件
秋田評議員の後任として木下治教授が新しく評議員として選出された。
7. 植物園長選出の件
門司教授が新園長となられた。
8. 諸委員の交代(別項参照)
9. 総合計画委員会報告(河田委員長)

建物について、物理2講座、情報科学研究施設2部門に対する建築に関連して理学部の計画を考えて行くつもりである。

さらに、理学部の将来計画についての考え方が述べられた。

10. 人事委員会報告(島村委員長)
11. 会計委員会報告(高井委員長)
別表のような要求事項があり、これに順位がつけられた旨報告があった。
12. 教務委員会報告(大木委員長)
理広報(Vol. 3, No. 3)に報告したがこれは今後煮つめていって教務委員会としての案をつくることになる。
13. 学生委員会(全学)
和田靖助教授から5月祭開催の期日としては5月14日、15日、16日に決まったとの報告があった。
14. その他
図書館関係: 教養学部図書館の整備、充実に関する

る特別委員会の第一次報告および教官用閲覧個室の申し込みについて今井教授より説明。

奨学委員(学部) 正田 篤五郎 (鉦)
 教職課程委員 竹内 均 (球)
 広報委員 佐々木 行美 (化)

新教室主任並びに新委員の一覧は第5号に掲載致します。

総合計画委員

久保亮五 (学部長)
 大木道則 (評議員)
 木下治雄 (評議員)
 委員長 河田敬義 (数)
 委員 山口嘉夫 (物)
 海野和三郎 (天)
 野田春彦 (生化)
 寺山宏 (動)
 古谷雅樹 (植)
 小堀巖 (地理)

昭和46年度設備充実費等予算要求事項表
 (順不同)

教室	事項	員数
学内共用	NMR 分光計改修	1式
物理	金工室設備整備	1式
化学	シグナルアナライザー	1式
天文	20 cm シーロスタット	1式
地物	高感度回転式磁力計装置(更新)	1式
地理	マイクロプロッター, デジタル カウンターおよび関連機器	1式
臨海	恒温室設備の更新	1式

全学各委員 (3月末までに変更された委員)

学寮委員 井上康男 (生化)

理学系研究科: 昭和46年度大学院学年暦

専門課程	夏 学 期				冬 学 期			
	授業開始 期日	授業終了 期日	定期試験	夏期休業	授業開始 期日	授業終了 期日	定期試験	冬期休業
数 学	5.17	10.23		7.11~9.12	10.25	47.2.18		12.19~1.9
物 理 学	4.12	10.9		7.5 ~9.11	10.11	2.25		12.20~1.8
天 文 学	6.21	11.27		7.18~9.10	12.6	3.31		12.19~1.3
地 球 物 理 学	4.19 (ゼミ) 7.1	11.6		8.1 ~8.31	11.15	2. 下旬		12.20~1.10
化 学	7.5	10.16	10.18~10.33	7.18~9.5	10.25	2.22	2.14~2.19	12.26~1.9
生 物 化 学	4.19	10.2	10.4 ~10.9	7.12~9.4	10.21	2.12	2.14~2.19	12.25~1.8
動 物 学	7.1	11.6	11.8 ~11.13	8.2 ~8.31	11.15	3.4	3.6 ~3.11	12.27~1.8
植 物 学	4.13	10.20		7.12~9.11	10.21	3.1		12.25~1.8
人 類 学	6.21	11.16	11.17~11.20	7.19~8.31	11.22	3.13	3.14~3.19	12.27~1.3
地 質 学	4.15 6.21 (47年入学)	10.2	10.4 ~10.9	7.11~9.10	10.21	2.19	2.21~2.26	12.25~1.7
鉦 物 学	4.19	10.16	10.18~10.20	7.12~9.11	10.21	2.25	2.26~2.28	12.23~1.11
地 理 学	4.12	10.9	10.11~10.16	7.12~9.11	10.25	2.19	2.21~2.26	10.20~1.8
相 関 理 化 学	6.14	10.30		7.18~8.29	11.1	2.26		12.26~1.9
科学史・科学基礎論	4.19	10.16	10.18~10.23	7.1 ~9.11	10.25	2.12	2.14~2.19	12.25~1.8

昭和 46 年 3 月 卒業者氏名

数 学 科 (4 名)

日笠 克巳 柴若 光昭 吉尾幸一朗
板橋 俊介

物 理 学 科 (3 名)

久木田文夫 松藤 哲 田島 俊樹

地球物理学科 (2 名)

笹尾 登 後藤 道夫

化 学 科 (2 名)

多喜 実 白崎英一

生物化学科 (4 名)

国府田泰子 小松みづほ 嶋田 敬三
宮下 敏行

生物学科 (植物学) (1 名)

森田 竜義

生物学科 (人類学) (1 名)

岩野 泰三

地学科 (地理学) (1 名)

水野 正光

昭和 46 年 3 月 29 日 大学院

修士課程修了者氏名

理学系研究科

数学専門課程 (24 名)

浅田 健嗣 井上 政久 岡部 恒治
落合 豊行 柏原 正樹 小西 芳雄
小林 新樹 佐々木幾太郎 鈴木 理
高橋陽一郎 竹内 郁雄 竹内 光弘
手塚 和男 中村 正彰 橋爪 道彦
原田 千秋 福原 真二 牧尾 一彦
松元 重則 三島川寿一 水谷 忠良
村田 実 森田 茂之 吉住 誠一

物理学専門課程 (37 名)

赤尾 直人 赤羽 隆史 赤間啓一

織木 暉 磯田 定宏 稲垣 睿
稲垣 慈見 岩堀淳一郎 小野 晃
小野 盛司 小野 嘉之 大野 正典
大藪 修義 菊地 正博 北原 和夫
木下 一彦 黒田 一明 佐々木晃史
佐藤浩之助 佐藤 正俊 佐藤 充
鈴木 史郎 関根 孝司 鷹尾 洋一
高木 伸 丹下 寿夫 名取 研二
直井 薫 原田 敏明 兵頭 俊夫
平木 哲 福田 京平 細谷 暁夫
三好 和憲 村松 洋 望月 忠男
山崎 聞雄

天文学専門課程 (8 名)

加藤 隆二 小林美知彦 大師堂経明
近田 義広 内藤 嘉春 中田 好一
野本 憲一 吉岡 一男

地球物理学専門課程 (16 名)

安藤 雅孝 宇野 栄 遠藤 昌宏
大島 善之 木田 秀次 田中 高史
竹内 治男 佃 為成 富田 宏
野村 拳一 本蔵 義守 宮崎 光旗
村上 敬 村上 勝人 力石 国男
渡辺 隆

化学専門課程 (39 名)

飯塚 洋 池田 徹 石井菊次郎
石塚 英弘 磯谷 順一 井上 礼之
今井 正彦 大河 和巳 太田 裕之
大貫 隆 角田 敦 金子 克美
川合 知二 川島 隆幸 空閑 重則
古賀 修 今野美智子 酒井 純
佐藤 恵子 下井 守 菅原 正
杉江 正昭 鈴木 和嘉 多田 全宏
滝口 秀樹 谷本 能文 近石 一弘
中川 潤 中野 義知 永野 肇
中村 庄平 中村 幹夫 中山 重信
野村 隆 松波 怜 松本 聡
水野 健一 村野健太郎 渡辺 和夫

生物化学専門課程 (18 名)

阿部 輝雄 伊藤 繁 五十嵐靖之
池田 穰衛 井上 朋子 大川いづみ
君村マミ子 古閑 良彦 佐々木卓治

鈴木 尚憲	須藤 和夫	田代 英夫	鳥海 充弘	中山 文麿
田中 重明	田矢 洋一	高原 康生	鉱物学専門課程 (4名)	
林 基治	宮崎 竜雄	諸井 将明	石塚 俊郎	狩野 康夫
動物学専門課程 (8名)			藤野 清志	小山 和俊
有松 靖温	榎並 淳平	太田 秀	地理学専門課程 (5名)	
金子 剛久	草薙 隆夫	佐藤 寅夫	田中 正央	生井沢 進
松本 明	和田 勝		松原 泰夫	三上 岳彦
植物学専門課程 (8名)			相関化学専門課程 (19名)	
芦原 坦	井原 一恵	井上 康則	青木 貞雄	伊藤 信彦
上木 勝司	絹村 厚子	小池 勲夫	井上 元	江連 和久
細田 永子	渡辺 正勝		加古 孝	小林 喜光
人類学専門課程 (1名)			斎藤 珠喜	高橋 俊雄
武田 淳			月岡 邦夫	角田 義人
地質学専門課程 (8名)			中村 保典	白田 耕蔵
青島 睦治	久保田和雄	佐藤 博明	吉村 将仁	
鹿園 直建	園 礎	田中 収		計 195 名

理学博士学位授与者

専門課程	氏 名	論 文 題 目
生 物 化 学	落 合 園 江	クロレラ・プロトコイデスにおけるクロロフィル合成の研究
同	大 木 玲 子	光化学系 I, II 粒子の分離による光合成電子伝達系の研究
地 理 学	矢 田 俊 文	エネルギー転換期における石炭生産配置の展開とくに資源条件との関連
学位規則第3条 2項該当	歌 田 実	本邦新第三紀凝灰岩類中の沸石帯
同	美 濃 羊 輔	アースロバクターによるインドール酢酸の分解に関する研究
同	守 隆 夫	出生直後に発情ホルモンを投与されたマウス腔上皮の変化
同	宮 崎 政 三	日本各地における断層破碎帯の構造地質学的研究
同	有 馬 暉 勝	チログロブリン・グリコペプチドの構造
同	野 崎 昭 弘	スペクトルの類における関数生成に関する完全性
同	吉 川 敦	作用素の分数幅, 補間空間および埋めこみ定理
同	河 野 実 彦	2位の不確定特異点を持つ n 階単独線型常微分方程式の二点持続問題
同	菊 池 紀 夫	カラテオドリ型条件をみたすコンテナント方程式について
物 理 学 (28名)	赤 羽 正 志	半金属マグネトプラズマに於ける空間分散の効果
同	新 井 政 彦	ユニタリティーと解析性の条件の下での前方付近に於ける高エネルギー散乱振幅について
同	稲 見 武 夫	SU (3) 対称なメゾンとバリオンの散乱に於けるベネジアーノの二重性
同	海老沢 丕 道	超伝導体におけるホール効果
同	大 岩 元	電子ビーム走査システムにおける三次収差の除去について
同	岡 村 浩	πN 後方散乱における吸収的 Regge カット
同	小 柳 義 夫	質量殻外の Veneziano 振幅とカレント代数

専門課程	氏名	論文題目
物理学	加藤 大典	無機液体レーザー溶液の特性
同	唐木 幸比古	Ising 模型における状態和の零点分布と相転移の関係
同	楠 正美	貴金属及び遷移金属の光散乱の理論
同	久保田 国晴	${}^6\text{Li}$ 核の構造
同	坂井 一雄	膨張宇宙における流体力学
同	佐々木 弘明	亜酸化銅の磁気光学的研究
同	佐藤 光	デュアルレゾナンス模型
同	高崎 史彦	180° における π^- 中間子光発生
同	滝川 昇	原子核における分子的構造
同	竹内 富士雄	陽子及びアルファ粒子によって惹きおこされる重陽子の break-up 反応
同	東辻 浩夫	銀河分布の相関関数
同	野島 行一郎	液体ヘリウムにおける excitation とその相互作用
同	浜田 泰司	プラズマ, ペーターatronに於ける乱流加熱
同	牧田 雄之助	タリウムハライドの電子過程
同	三原 稔	III-V 族半導体の転位速度
同	宮崎 忠	ローレンツ群の無限次元表現と素粒子物理学
同	村井 信行	ウィック・カトコスキー模型におけるレジエ・トラジェクトリ
同	八幡 英雄	イジングスピン系確率模型の臨界緩和
同	山口 豪	II-VI 族半導体中の深い不純物準位とそのパイブロンニックな構造
同	山地 邦彦	相転移点近傍における超伝導体のゆらぎ効果
地球物理学 (4名)	名岩 坂泰	信熱圏下部におけるエネルギー輸送と酸素原子・分子の混合過程
同	Rashad Mohamed Kebeasy	P波の走時異常とサイモテクトニクスおよび地震活動度との関係
同	西川 正名	内燃型ブリッジマン・アンビルの実用化および地球物理学への応用
同	深尾 良夫	長周期P波より推定した深発地震の震源過程
化学 (14名)	名伊藤 正	時コバルト錯体の絶対配置と立体配座に関する研究
同	上野 晃史	赤外スペクトルと速度論の同時測定による反応機構の研究
同	宇田川 康夫	高分解能分光法による分子の励起状態の研究
同	内田 真	微量金属イオンによって誘発される水溶液内酸化反応
同	太田 俊明	分子化合物の分子軌道法による研究
同	桜井 雄三	n -ブテン異性化その他関連する反応の機構のマイクロ波分光法による研究
同	中西 洋志	酸誘導体の立体配座
同	野上 隆	電荷移動相互作用と化学反応
同	三吉 忠彦	ホフマン型クラスレート of 結晶構造
同	森本 剛	固体イオン結晶の電気泳動における陽イオンの同位体効果
同	山田 紘一	有機リン (V) 化合物の反応
同	山本 治	合成高分子の熱伝導に関する研究
同	吉藤 正明	リンを含む反応中間体
同	和田 直人	ビニル型遊離基の研究
生物化学 (6名)	岡田 光正	光合成細菌におけるカロチノイドの光による吸光度変化
同	川島 誠一	魚類精子核中のデオキシリボ核蛋白質

専門課程	氏名	論文題目
生物化学	佐藤和彦	葉緑体電子伝導体の研究
同	榊佳之	λ ファージ DNA と細胞膜との結合に関する研究
同	鈴木春男	<i>Aspergillus niger</i> アミン酸化酵素の研究
同	広瀬進	複製および転写に伴う DNA の単鎖切断
動物学 (4名)	名雨宮昭	南繊毛形成と細胞集合との関係
同	野間口隆	細胞分裂, 胚発生に及ぼす放射線の影響
同	馬場昭次	繊毛のたわみ剛性率および弾性率
同	藤沢弘介	RNAase system の制御機構, 及びそれに対する X 線の影響
植物学 (3名)	江村一子	ユーラシア産カラマツソウ属の分類学的研究
同	黒岩常祥	クレピス・カピラリスの生長過程における染色体の動態に関する研究
同	蓮沼仰嗣	アカバンカビの核酸分解酵素の制御機構に関する遺伝生化学的研究
鉱物学 (1名)	大隅一政	モリブデン酸ガドリニウムの結晶構造について
相関理化学 (4名)	青木禎	炭酸ガスレーザーを用いたオブティック・マクスティック効果
同	大成誠之助	ポリペプチドの真空紫外吸収スペクトルとそのコンフォーメーション依存性
同	近藤炬朗	アペナ・メソコチルの光による成長制御とオーキシンの関与
同	本田皓一	窒素原子及びイオウ原子を含む有機化合物の気相光化学反応の研究

教官人事移動 (除退・休職)

安藤鋭郎教授

氏名	所属	発令事項	発令年月日
川口 湊	物理	助手	46.2.18
木村 俊房	数学	教授	46.3.1
吉藤 正明	化学	助手に採用	46.4.1
太田 俊明	化学	助手に採用	46.4.1
広岡 知彦	化学	助手に採用	46.4.1
東辻 浩夫	物理	助手に採用	46.4.1
小柳 義夫	物理	助手に採用	46.4.1
佐藤 光	物理	助手に採用	46.4.1
森田 茂之	数学	助手に採用	46.4.1
榎本 彦衛	数学	助手に転任	46.4.1
高野 恭一	数学	助手に採用	46.4.1
雨宮 昭南	動物	助手に採用	46.4.1
永 嶺 謙 忠	物理	助手配置換	46.4.1

安藤鋭郎先生は昭和 8 年東京帝大理学部化学科を卒業, 続いて同大学院に入学された後, 同 11 年同大理学部副手, 15 年助手, 17 年講師, 19 年助教授を経て 20 年に同大教授 (放射線化学研究所, 後に理工学研究所) となられ, 33 年以降は新設の理学部生物化学科において生体物質化学講座を担当されて来た。在職 35 年間の長きに亘り本学付置研究所ならびに理学部生物化学科および大学院理学系研究科生物化学専門課程において研究と教育とに盛力され, 学術上重要な業績をあげられると共に, 多数の学者, 研究者を育成し, 生物化学の発展に多大の寄与をされて来た。また, 本学および学部において諸種の委員会の委員長あるいは委員として果たされて来た教育的並びに行政的功績も数多い。一方, 学外においても日本化学会および日本生化学会において各々の副会長をはじめとして多くの役職を歴任され, 現在も日本化学会の常議員, 日本生化学会の評議員として活躍されている。また, 国際学術雑誌 "International Journal of Protein Research" (Copenhagen) の associate editor としても御活動中である。

七教授御退官

本年は理学部から七人の教授の方々が退官される。今号では生物化学教室の四教授について近い方々に記事を書いていただいた。赤松先生, 原先生, 田中先生については次号に掲載の予定である。

学術研究においては, 初期にはステロイド化学を専攻され, ステロイドの反応と化学構造研究, 合成女性ホル



安藤 鋭郎 教授

モン「ヘキセストロール」の新合成(昭17)、紫蘇糖の最初にして唯一の合成(昭21)などの創意的研究成果は学術的に高貴な価値を示すとともに、わが国の産業にも手がたい基礎を提供している。

昭和21年よりはタンパク質の精製と化学構造に関する研究を開始され、現在に至るまで常にこの分野ではわが国における先駆的役割を果たされて来ている。特にプロタミンの化学構造に関する研究は有名で、代表的なプロタミンであるニンシ精子中細胞核中の強塩性タンパク質プロタミンの一主要成分の全化学構造を諸外国の先進研究者らを追いついて決定された(昭36)。これはわが国でタンパク質の一次構造が決定された最初の例であるとともに、この種の塩基性タンパク質の構造が決定されたのは世界でも最初であり、細胞核内物質の構造研究方法を開発確立した点で世界的に非常に高く評価されている。また、プロタミンの生物学的役割についても広く興味を持たれ、すでに初期の研究で、ニンシ精巢の核中では初期のDNA-ヒストン複合体が精子形成に伴ってDNA-プロタミン(クルペイン)複合体とおき代ることを化学的に実証されている。

なお、前記構造研究で開拓された手法を種々の酵素類に応用し、それらの構造の解明、および構造と活性の関連についてもいくつかの注目すべき成果をあげられる。

水泳、野球、スキーなど各種の運動を今なお自らなされるスポーツマンであり、写真、自動車を趣味とする点など現代の若者と変わらぬ万年青年であり、まったく衰えを見せぬ、黒髪と若々しさの秘密もその辺にあるのではなからうか。

江上不二夫教授

江上不二夫先生は明治43年11月21日東京生れて、高師附属小学校、府立五中、東京高校(理甲)を経て、昭和8年東大理学部化学科を卒業された。卒業研究は左右田徳郎教授の下で、グルコシルファターゼに関するものであった。その後フランス政府招聘留学生として、ス



江上不二夫 教授

トラスブル大学生化学、パリ生物物理化学研究所で研究されて帰国、東大理学部化学の副手助手を経て、昭和17年名古屋大学理部助教授、18年教授として、有機化学後に生物化学の講座を担当された。東大理学部に生物化学科が生れて後間もなく昭和33年東大教授に併任となり35年以降専任教授として現在に至っておられる。その間生化学の研究教育に大きな足跡を残されただけでなく、科学者として社会的な活動にも参加されて来た。昭和24年、科学者の総意を結集すべき機関として日本学術会議が設立されるや、若手研究者の与望を担って会員に選出され、以来連続8期にわたって会員をつと

め現在会長として活躍されている。外国語に堪能なこともあってか、国際学術交流や平和運動にも努力して来られた。

先生は all-round biochemist として、その研究の範囲は極めて広い。各種硫酸エステルの構造や性質に関する研究、それらを加水分解するスルファターゼ類の性質や生理的役割に関する研究、海産動物のグリコンダーゼ類の精製、性質、それを用いての糖タンパク質の研究がある一方、細菌の硝酸還元酵素をはじめとする無機窒素化合物の代謝の研究、それと関連してニトロ化合物の代謝、チトクロムの研究等がある。また細菌毒素の化学的研究にも造詣が深く、赤痢菌、緑膿菌の毒素や、溶血性連鎖球菌の溶血毒素等も研究された。毒素から発展して核酸の研究にも入られ、その化学的分解(ヒドラジン分解法の開発等)や、各種の新しいリボスクレアーゼ(タカジアスターゼのリボスクレアーゼ T_1 , T_2 その他微生物の酵素多数)の発見に至る研究を指導された。核酸の生物学的重要性が強く認識され、分子のレベルで研究されるようになって来た時に発見された、新しい特異性をもつリボスクレアーゼ T_1 は、早速世界の核酸学者に提供され、Holley らによる転移 RNA の一次構造の解明を可能にした。この仕事によって Holley は 1968 年ノーベル賞を受け、江上教授は、上記の業績によって本年度学士院賞を受けられることになった。

先生は常々研究するものの態度として、“自分が発見したことを愛し育て、伝統を発展させること”を強調され、現在の世界のトップと競うことばかりが重要ではないと言われている。ある時ある雑誌に詩のようなものを発表されたことがある。その一節に“……山に登るなら、ぼくはゆっくり登りたい、おもわぬ花や小石があるだろう。たのしみながら登りたい……”，というのがあった。これは研究態度について語られたものなのである。現実の先生ははなはだせっかちである。研究室でピクニックに行くと、花や小石を楽しむのは弟子ばかりで、先生はわき目もふらず登って、道の角々で振り返って遅れたものを待っておられる。弟子達がそこに到達するや否や、また一人さっと登ってしまわれるのである。

小倉安之教授

明治 43 年 10 月 9 日、小倉において生れ、少年時代、小倉、京城で育ち、昭和 7 年山形高等学校を卒業、高等学校時代には、山岳部員でもあり、現在のコーポルトヒュッテの前身の建設・維持にも参加された。昭和 10 年東京帝国大学植物学科を卒業大学院に入学。この



小倉安之教授

間、昭和 13 年に助手となられ、昭和 14 年には、大学院を退学、昭和 18 年に助手、同 20 年講師と徳川生物学研究所所員を兼ねてはいられたが引続き東京大学で研究を続けられた。東京帝国大学では、柴田桂太氏に師事され、田宮博氏の指導をうけられた。酵母のチトクロム系の研究においては、チトクロムの酸素による酸化の順序、と酸素の濃度による酸化の定常状態の両者からチトクロム類の配列の順序について論じた。そのコウジカビ、クロカビ、ブドウ糖脱水素酵素、酸化酸素の研究から、酸化還元酵素、カタラーゼの反応速度論による解析を研究されてきた。昭和 26 年に博士、昭和 29 年には助教授になられた。この間、昭和 28 年から、米国、ペンシルバニア大学ジョンソン研究所で、チャンス氏の下で、カタラーゼ反応の中間段階の研究をされた。昭和 34 年には、生物化学科新設と同時に同学科にうつられた。昭和 35 年には教授となられ、酵素学講座を担当。研究はヘム蛋白質酵素、銅酵素、フラビン酵素と主として酸化還元酵素の研究を進められ、反応速度論、生物物理学的な手法を主に用いられた。また酵素系、生体内粒子系での酵素活性の研究にも進まれた。

お子様は 3 女、奥様は声楽家。南朝鮮の古美術の貴重なコレクションをお持ちで、このコレクションは、現在、博物館として保存されている。一部は国立博物館に

も借出中である。学生時代に留置所暮らしの経験のある数少ない教授の一人である。

高宮 篤教授

明治 43 年 8 月 23 日に生れ、大正 11 年武蔵高校尋常科高等科を経て、昭和 4 年東京帝国大学理学部植物学科に入学、入学当時すでに地衣類の分類学者として、知られていた。また当時、陸上競技部で長距離走者として東大の第一人者でもあった。植物学科において、植物



高宮 篤教授

生理学に転じ、柴田桂太氏に師事、田宮博氏の指導をうけ、コウジカビの生長の熱力学・炭素代謝の研究に従事された。昭和 7 年卒業後も引きつづき、大学院で研究を続けられた。昭和 8 年徳川研究所員となり、昭和 17 年母校武蔵高校の教授となられた。昭和 20 年理学博士、昭和 23 年東京工業大学の講師、この間主として徳川研究所で、ギ酸脱水素酵素の反応拮抗阻害剤、酵素の反応速度論の研究を続けられた。東京工業大学では、酵素反応の速度論の他、アクチノミセス類における、水素の酸化による独立栄養生長を発見した。高温を好む細菌の研究等、異常な環境に生育する微生物の生理の研究に進まれた。この間昭和 24 年に、助教授となり、昭和 27 年から昭和 29 年まで病氣療養、昭和 31 年に東京大学理

学部植物学教授としてかえられた。

植物学教室では、水素代謝の研究も行なわれたが主として、光合成の機作の研究をされた。

昭和 33 年、生物化学課程の大学院ができたのと同時に、同担当昭和 34 年、生物化学科の新設と同時に同学科に移られた。生物化学科では引続いて、光合成の研究の指導にあたられた。この間昭和 38 年から 1 年間アメリカ合衆国ケテリング研究所に留学された間を除き理学部で、教育研究のみならず、理学部、東大術審議会、学術会議の各種の委員としても活躍された。お子様は 2 男 1 女、奥様は東京女子医大の内科のお医者さま。

投 稿

顕微鏡写真をとるたびに誰か 1 人が廊下に立って「交通止」の役目をしなければならなかった古い木造の建物、これが小石川植物園のわれらが植物学教室であった。いまの工学部 3 号館の場所に、5 寸角の材木枠を組み、ボルト締めにして崩壊を防いでいた亀裂だらけの赤レンガ館、それが動物学教室であった。

したがって、昭和 9 年に新館（2 号館）に移転を完了した時には、引越しに明け暮れた半年間の苦勞も吹き飛んだ思いで、がむしゃらに実験に励げんだものでした。

いざ退職の段になると、いろいろのことが昨日のことのように脳裏に浮びます。明治の大学創設の理念は戦後の学制変革の時点で一変したはずであるのに、やはり伝統という実質は人の交代をまたねばならなかったようです。理学部も間もなく昭和 2 桁の時代を迎えることでしょう。39 年間、通いつづけた本郷はやはり私のふるさとです。自己に忠実に、そして自信のもてるまで研究のできたこのよい職場に定年まで勤めさせて頂いたことは、本当に幸福であったと感謝の気持で一杯です。本当に長い間お世話になりました。心から厚くお礼を申し上げます。去る者の思いはみな一つであろうと思います。どうか皆様のご健康で本物の探求するよりよい環境をつくり、今後益々ご発展なさいますことを希っております。

昭和 46 年 4 月 1 日

田中 信 徳

理学部ところどころ

古い文書から No. 2

ながい間親しまれていた東大前を走る都電もついに去る 3 月 17 日限りでその姿を消した。

今回は東大前に電車が通るまでのいきさつのうちの

2, 3をその頃の新聞紙面から拾ってみた。最後の記事(M. 45. 6. 29)にある2万円がやがて今日の地球物理学研究施設のとぐちになったといってもよいであろう。

記

東京大学一覧より

大正2年4月 茨城県新治郡柿岡町および小幡村の民有地14万5,000余坪を購入して理科大学物理学教室の敷地とした。ついで同町における官有地5,800余坪が農商務省より所管換となったので、これを本学の所有に移し、同教室の敷地に加えた。

明治37年1月29日 日本新聞

大学と電鉄問題、大学は延長強硬反対

東京市街電気鉄道延長工事が、本郷4丁目に止るを見て、ことの真相を知らざる人々は、帝国大学が4丁目より北に、電気鉄道の延長を絶対的に反対したるごとく誤信するものあれども是は大なる誤にして大学が其筋に提出したる具申書にある如く、「本校に於ても教室研究上に障害を来たさざる限りは、出来得る丈には交通機関の普及を希望す」。而して左の条件を提出せりといふ。

「1秒時間10週以上の交番電流を使用するか、若しくは蓄電池式を用ふるときは、理科大学物理学教室より300メートル、工科大学電気工学教室より100メートルの処迄線路を接近せしむると得」。右の条件に依り交番電流を使用するか電池式によるか、若しくは他の電磁的障害の殺滅する方法によるときは、森川町大通りは物理学教室より300メートル以上なり、また電気工学教室をも100メートル以上を為し得べきを以て、優に森川町大通りに電気鉄道を布設し得べしと。

明治42年10月24日 東京日日新聞

帝大前の電車大学側で譲歩

本郷4丁目より駒込方面に敷設する電車軌道に関しては東大理科大学の故障により一時中絶せしも、或距離迄大学を移転すべき費用を会社より支出せば大学に於ても之を許容することに決し、目下精密に調査中なるが、聞く所によれば、理科全部の建築物を移転せしむるに及ばず、マグネット磁針其他構外の電流及び震動を感じべき部分の移転のみにて可なる由なれば、経費も最初の予想額以内にて解決すべきかと。

明治45年6月29日 万朝報

帝大前通りの電車やっと敷設出来る

本郷4丁目より帝国大学、高等学校前を通る電車の設計は帝大との関係上特許命令にて禁止され居りしが、今

回電気局より理科大学へ2万円、中央气象台へ1万円の移転費を納めるに協定成り、電車布設の交渉纏りたれば、昨日電気局より警視庁へ出願手続を了せり。

(吉野誠治)

お知らせ

○昭和46年度メキシコ政府留学生の募集

専攻分野: スペイン語、メキシコの歴史・地理・経済・法律・文学・美術・中南米の歴史・地理・経済・法律・文学・博物館学・人類学・考古学
渡航時期: 昭和46年6月初め
留学期間: 昭和46年6月~47年3月まで
締切日: 4月17日(土)

○オスロー大学国際夏期学校に参加する奨学生の募集

募集人員: 1名
開校の場所: オスロー大学
期間: 昭和46年6月26日~8月6日まで

○1971~72年度ダルハウジー大学アイザク・ウォルトン・キラム記念奨学金留学生募集

分野: 自然科学・人文科学・社会科学
課程: 修士・博士

○昭和46年度トルコ政府奨学金留学生の募集

専攻分野: トルコ語・トルコ文学・歴史・地理美術・農学等
応募資格: 大学卒業者、年令40才未満
締切日: 4月20日(火)

○昭和46年度ハンガリー政府奨学金留学生の募集

専攻分野: 現代ハンガリー史・近代ハンガリー史・現代中部ヨーロッパ史・ハンガリー語・近代中部ヨーロッパ史・ハンガリー文学・美術史・美術および人文学・理学・工学
応募資格: 大学卒業者、年令35才未満の者
締切日: 5月11日(火)まで
以上の詳細については、理学部大学院掛まで照会のこと。

編集 和田昭允
理・1号類 217号室 内線2298